

## メルボルン大生からの留学アドバイス 担当：市川&内田

こんにちは。「世界の窓」に出演させていただいた市川諒と内田優花です。現在オーストラリアにあるメルボルン大学に通っています。「世界の窓」で話さきれなかったことが多かったのでまとめてみることにしました。ぜひご一読ください。



### 市川諒

104期生。中高6年間ゴルフ部に所属。  
現在メルボルン大学で商学部在籍。希望専攻はアクチュアリー。高校時代私立文系だったのにも関わらず独学で数3を勉強し、現在大学の科目を半分を数学関連の授業を取っている。高校時代はゴルフ部の部長をしていた。



### 内田優花

103期生。中高6年間美術部に所属。高校1年生の時にターム留学を経験し、オーストラリアに住んでいる人達の多様性&寛大さに魅了される。現在メル大でアジア学(Major)、韓国語(Minor)を専攻。アルバイトは日本語教師、イラストレーター、ウェイターを経験。メルボルンで一番好きな場所はDymocks Cafe。一人旅が趣味で近い将来は色々なアジアの都市に住んでみたい。

## ・海外進学しようと思ったきっかけは？

市川

高1の時にオーストラリアの大学のOpen day に行ったことがきっかけです。当時はただ単に海外の大学を見学するだけで、進学の意識はありませんでした。理由は2つあります。まずこれまで日本の教育機関で学んでいた私にとって海外で生活し、勉強をするという未来が見えなかったからです。そして参加したopen dayの模擬授業の内容が全く頭に入って来なかったからです。今考えると大学はオーストラリアの高校2年生をターゲットに模擬授業をしているので、英語に触れる機会の少ない日本の高校1年生が理解するのが難しいのは当然ですが…

しかし高2の時に転機が訪れました。森村でメルボルン大学のファウンデーションコースであるトリニティカレッジの説明会が開かれたことです。多言語国際センターの松本先生が「放課後暇な人おいで～」と声をかけてくださったことからふらっと立ち寄りました。そこでオーストラリアの教育の質の高さを改めて認識し、高1の時の不安が「憧れ」に変わりました。振り返ると当時の学力では到底力不足だったと思います。

しかしここでひとつ言えることは「憧れ」を持つということは一歩先の未来へ進む原動力になるということです。

そこからは英語の勉強をコツコツ始めました。トリニティカレッジではIELTSの成績が6必要だったのですが、私の初受験の成績は5でした。スピーキングとライティングに関しては4.5です。今だから言える笑い話ですが、私はこの時スピーキングのテストの後にIs my English good??と面接官に聞きました。何を聞いているんだ(笑) という話ですが、面接官が苦笑いしていたのを覚えています。

私は英語は平均以上という印象で、特別できるというわけではありませんでした。わかりやすく定期試験で例えると学年で30番目くらいでした。

当初の予想は初受験の時に5.5、次の受験で6.0を取る予定でしたが予想と乖離した結果に挫折したのを覚えています。ちなみに私はIELTSのテストを合計で6回ほど受けました。最後には6を取れたから良いものの、高い受験料を何度も払ってくれた親には感謝です。私の最高スコアとしてはreading:7 listening:6.5 writing:6 speaking:6です。

最初の4.5から考えると大きな成長ですね（苦笑い）

内田

高1の時に経験した森村のターム留学でオーストラリアの積極性が求められる教育が自分にあっていると感じたこと。ターム留学後の日本での生活が全く合わなくなっていたこと。メルボルンが教育で有名な都市だったこと。

## ・いつ海外進学を決意しましたか？

市川

僕は高3の夏休み明けにメルボルン大学(トリニティ)に入学できることが決定しました。メルボルン大学は高校の成績と英語のスコアだけで出願ができるので、指定校よりも早い時期に合格がでていました。しかし僕は日本の大学に行くか悩みました。学費、生活費は日本の大学の方が圧倒的に安いです。しかしながらそれ以上に僕は当時やりたいことが決まっていませんでした。僕は高校時代私立文系で、経済学などは日本の大学でも十分に学べます。日本で勉強できるものをわざわざ海外で勉強する意味はあるのだろうか。ここが決断できなかった理由だと思います。実際に今メルボルンで勉強していて、当時の感覚は間違っていないと思います。自分がやりたいことが明確に決まっていない段階で海外の大学進学を決断することは避けるべきだと思います。オーストラリアの大学は課題の量も多いですし、エッセイなどでは深い理解が要求されます。自分がやりきると決めたことでないと続けるのは難しいです。少し脱線しましたが、結論としては慶應に行くかメルボルン大学に行くかで悩み、慶應が不合格だったので即決でした。受験生のみなさんへのアドバイスとして、海外大学は浪人できない学生にとって最高の選択肢だと思います。なぜなら海外の大学はいつでも出願することができ滑り止めとしても候補になります。日本の大学よりも入学時期が少し遅いので、日本の大学の合否発表後に出願できますし、日本の大学受験が始まる前にも出願できます(国、大学によって異なる為個人でよく調べてください)。僕のように夏休みにメルボルン大学を滑り止めとして持っていれば、第一志望だけに集中できます。ちなみに慶應は国語が受験科目になるので、私立文系にも関わらず現代文と古典は全く勉強してないです。まあ挙げ句の果てのこの文章力なのですが笑笑滑り止め大学が第一志望よりも評価の高い大学というあまり聞かない状況になりますが、このような作戦もあります。多言語国際センターの松本先生はこのような出願方法にも詳しいので聞いてみると良いでしょう。

内田

中2から考え始め高3の春にメルボルン大学に一本決め。やりたいことがはっきりわかっていたので日本の大学は全く考えませんでした。上記の市川君の海外大学を滑り止めにするやり方ですが個人的にはおすすめしません。浪人しないために行くところにしてはきつすぎると思います。外国の大学に行くということは場所が違うだけでなく、友達作り、家探しを1からして常に外国語で話すという環境におかれて、日本の大学の何倍もの教育費・生活費を払うことを意味します。“日本にいる時の何倍ものプレッシャー・不安を受け入れる準備はできていますか？”厳しい言い方になりますが即答できなければやめた方がいいと思います。別の言い方をすると外国はあなたを劇的に変える場所です。今居る場所に満足していない、勉強以外にも常に成長を求める方におすすめしたいです。

**・ 海外進学を誰に相談しましたか？**

市川

海外進学は松本先生に相談しました。高3の時の担任よりも相談しましたね笑。  
オーストラリアをはじめ、多様な国の情報を持つてるので、気になることがあつたら、まずは松本先生に話しかけてみてください (決して先生の回し者ではないです、本当に良い先生なので是非!) 多忙な方ですが、留学の相談は最優先で乗ってくださるでしょう。もし先生に何を話せばいいかわからないという方は、森村の図書館に何冊か海外大学のパンフレットがあるのでみてください。図書館に入ったこともないという高校時代の僕のような方はメルボルン大学のホームページを検索してください。気になったことにはまず顔を突っ込んでみましょう♪これもオーストラリアで学んだことです。

内田

松本先生とオーストラリア留学センター。両親が海外の大学院に行っていたこともあって反対されませんでした。自分がターム留学から日本に帰ってきて精神的に死んでいたのも海外が合うことも理解していたんだと思います笑

・ 海外進学に向けて、一番一生懸命準備したこと

市川

先ほど英語がそこまでできたわけではないという話をしましたが、やはり1番勉強した科目は英語です。ただ、海外進学のための英語の勉強というよりも日本の受験勉強の英語を勉強しました。日本の長文読解の勉強をしていると reading の点数だけ異常に伸びました。Readingは英検1級レベルでした。それだけ日本の大学受験の長文読解は勉強する価値があると思います。海外大学へ進学が決まった方も日本の長文読解はやっていて損はないでしょう。大学に進学を決意した後という点では数学を勉強しました。我ながら頑張ったと思うことが数3を独学したことです。私立文系の僕は高3の時は数学を一切勉強しません。高1の内容から復習を始め、新たに学問を自習したことは大きな達成感でした。

そして現在は理系に混じって数学の授業を受けています。大学でもこのように学んだことのない分野を独学で切り開くという力は求められていますし、それが1人の学生、社会人としての教養だと思います。ちなみに僕は今エネルギー問題に興味があり、水素についての勉強をしています。化学基礎で赤点の人が水素に興味を持つのですから、人間の興味は変わりますね (笑) 気になることがあれば勉強してみましょう！内田さんも独学好きそうなので海外大生の共通点かもしれないですね？

内田

IELTSを独学で(塾に通わずに)勉強したこと。おかげで一発でファウンデーションコースの基準を満たすスコアが取れました。そして日本の歴史と現代社会の授業の復習をしました。今大学でアジア学を専攻しているのですが日本社会を説明するのにとても役立っています。ですが松本先生に言われて今実感するのが海外留学は準備できないことがたくさんあるということです。例えば人種差別に対する対応です。いつどんな人に差別されるか想像できますか？かなり難しいと思います。違う社会に飛び込んでこそわかることがたくさんあります。そして現地にいるからこそ学べるものがたくさんあります。

・進学前後で、  
思っていたことと違って戸惑ったこと

市川

日本の教育制度が遅れていることに衝撃を覚えました。僕は日本の教育が充実しているというイメージがあり、特に数学がすごいと信じていました。しかし実際にメルボルン大学で勉強をしていると日本の教育の遅れに気付けます。まず、入学方法が異なります。

上述の通りメルボルン大学に入ろうとすると、僕のような日本の高校（インターナショナルではない）を卒業した人はファウンデーションコースを経て入学します。その一方で中国、シンガポールなどの人は直接メルボルン大学に進学できます。ベトナムなどの東南アジアの国でも直接入学できることがあります。シンガポールは高校の単位が大学の単位として認定される場合すらあります。日本の高校では海外の大学に進学できるレベルを満たせていないということです。次に、同じ高校数学を見てもオーストラリアの方が進んだ内容を勉強していることが多いです。これが海外にいるからこそ知ることができる悲しい現実だと思います。

脅すような始め方をしましたが、状況を整理します。メルボルン大学の数学の授業はアジア人ばかりです(笑)オーストラリアの数学がより多くの数学に触れると言っても、内容は日本の参考書でいう基礎から標準問題が多く、赤チャートなどで出てくる何時間考えても答えがわからない問題は一通も出てきません。つまり日本の教育は全体としては悪くないということです。しかし、上位層の中の戦いでは負けてしまうというのが現状です。あなたは正規分布の真ん中で戦いますか？それとも1番右で戦いますか？あなた次第です。

(↓メル大レクチャーライドより)

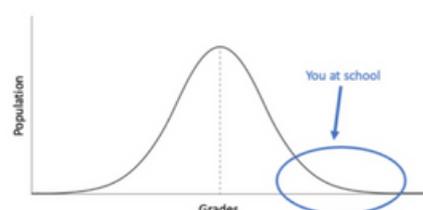
#### Learning at university

University is hard. It is much harder than you expect.

It is much harder than what you did at school.

This subject is difficult. It requires you to think in new ways about complex ideas.

You should plan to spend 10 hours working on each subject per week.



・進学前後で、  
思っていたことと違って戸惑ったこと

内田

-郊外とシティの違い

ターム留学の時は郊外に住んでいたの空は広いし物価も日本と変わらないと思っていたのですが大学に行くためにシティに住みはじめたらやたらにビルは高いし物価が東京と比べて断然高いことに気が付きました。今円安(\$1=¥95)で¥2000ないと外食できません。

-生活費の高さ

上にも書いたのですが特に家賃の高騰がひどいです。シェアハウスはまだしも、一人暮らしは本当に高くつきます。一月20万円とかザラです。Student accomodation(学生用の住宅)は学生に優しい値段ではありません。普通のアパートの方が安かったりします

-中国人の多さ

英語圏だから白人が多いと思ったら大間違いです。シティではなんなら中国の方の方が多です。大学の学生のマジョリティはそうですし、メルボルンの至る所に中国の方が経営しているお店があります。

-西側で生きるとはどういうことか

西側で生きるとはどういうことかということシステムが違う場所で生きるということですね。まず社会の変化が早いです。給料も家賃も毎年上がって行きますし、行きつけのお店が突然なくなるということもしばしば(なくならなくても仕事ができる人はどんどん引き抜かれて行くので同じお店でもいつの間にか質が落ちていたりします)。メルボルンはよく国際時勢を反映し、戦争が起きればウクライナの人が流れてくるし街のいたるところにパレスチナを応援するポスターが貼ってあります。メルボルンにいと必然的に政治的緊張を目の当たりにすることになります。そして日本と絶対的に違うのが医療体制。食中毒になって病院に行くだけで\$200取られます。インフルエンザの時に病院に行ったら検査だけで薬すらもらえませんでした。オーストラリアは基本的に自然療法スタイルなので現地の方は病気になっても滅多に病院にいかないことに気が付きました。最後にこれはオーストラリアだけのことなのかもしれませんが常に待たされます。郵便局に行って列に並ばなかったことはありません。オンラインショッピングでも1週間は通常待たされます。大学の授業でさえストライキで何回もなくなりました。日本みたいに色んなことがスムーズにいくわけでは全くありません。

・進学前後で、  
思っていたことと違って戸惑ったこと

市川

ネットワーキングをすることが難しいです。僕は小学校から森村だったので新しく友達を作るということが苦手でした。言語、文化の壁もあり、友達を作ることは難しいです。

おそらく内田さんは友達作りが上手そうですね。本当に性格がよく出ますね。

オーストラリアでは何をすることも友達の紹介が多いです。

僕は社会人と話す機会がありますが、多くの方がネットワーキングをすることが大事だと言います。とりあえず人の集まりに参加してみる。積極的に行きましょう！

内田

自分はトリニティ(留学生のいくファウンデーションコース)でたくさん素敵な人に出会いました。自分は日本で自分の考え方を理解してもらえないことが多々あったので抑圧されていた分多様性の中の自由さに心地よさを感じました。異文化とはいえどみんな英語という共通した言語で話すので個人的には言語や文化の壁はあまり感じませんでした。大学ではホームルームのようなものがないので友達を作るのが難しいなと感じたこともありましたが前の学期に出会った子達と偶然同じクラスをとって仲良くなるというパターンに2年生になって気が付きました。(だから大丈夫、市川君！)

自分が困ったのは忙しさといつ何が起きるかわからないという不透明さに慣れることです。メルボルン大学本当にきついです。毎学期ストレスと疲労で死にそうになります。そして前述した通り社会の変化のスピードが速すぎて何が起きるか毎日わかりません。メルボルンには実は変な人がたくさんいます。ずっと叫んでる人とか卑語を捲し立ててる人とか毎日出会います。こういう人たちに話かけられることは少ないですが何か起きた時に自分で対応しないといけないというプレッシャーに常に付き纏われています。最近やっと慣れてきました。

## ・進学して身に着いたと思うこと

市川

僕がメルボルンで身についたと思うことは聞かれた問いに返答する瞬発力です。自分の考えを持ってすぐに答えなければ周りの子に発言され、授業に取り残されてしまいます。

ちなみに授業中の参加点は皆さんが思っているよりもシビアです(笑)

この辺りは言葉で表すのは難しいので実際に体験するしかないですね。

皆さんが海外で揉まれるのが楽しみです。(性格が悪くてごめんなさい)

内田

物事がはっきり見えるようになったこと。というのも英語でエッセーを書いていくうちに原因と結果を常に考えるようになってこのスキルを日常生活にも応用するようになりました。

そして進学するというよりオーストラリアに暮らして身についたことなのですが、考えながら動くという習慣ができました。前述の通り、オーストラリアでは計画通りに行くことが少ないです。友達が急に約束に来れなくなったり好きだったtutor（ディスカッションなどの少人数クラスの先生。講義を行うlecturerとは異なる）が急に異動になるなどよくあることでその都度柔軟に対応しなければなりません。日本では常に入念に準備をしていたのですがオーストラリアでは準備は軽くするけど大事なものは何か起きた時にどう動くかだと心がけています。日本にいた時は慎重に考えてから行動していたのですがオーストラリアではまず動いてみるのが大事だと気がつきました。

・ 高校在学中の海外進学を考える後輩に  
ひとことアドバイス

市川

海外大生はあんまりキラキラしてないです。勉強して、ぐだぐだして、また勉強して。メルボルンという街はやることが少ないからかもしれません。あと日本と比較してしまって帰国したくなります。しかし、それ以上の成長を期待できるというのが海外留学の良い点だと思います。日本に帰った時に日本の大学生と会いますが、自分の普段の生活が誇りに思えるくらい充実した日々を送っていると云えます。自分の成長に投資という点ではきついですが海外大学をお勧めします。

内田

市川君の書いたことに返信すると、留学が常にキラキラしたものではないということに賛成します。辛いこといっぱいあります。でも楽しい時は日本で味わえないくらいめっちゃくちゃ楽しいです。メルボルンが何もないといえば何もないんですけど(エンターテイメント系が少ないしなんでもかんでもお金がかかるので消費という面ではやることが限られる)個人的にはチャンスがゴロゴロ落ちている街だと思います。「これやってみたい!」ということがあってそれを誰かに相談したら本当にできちゃったといことがよくあります。自分は前のやっていたバイトはお店に入ってマネージャーに初対面で話しかけてここで働きたいですと伝えたらトライアルに参加させてくれてそのまま雇ってもらいました。そんな風に自分から動いたら物事を動かせるので自分の運命は自分次第だとメルボルンでは思えます。

## ・その他、ぜひ伝えたいこと

市川

今回先生からオファーをもらって何か学生に伝えられることないかと考えました。結論は親に感謝をすることです。留学は自立をするいい機会です。親のありがたみがよくわかります。親がご飯を作ってくれる、送り迎えをしてくる。普段何気なくしてもらったことを全て自分でやらなければなりません。すると親への感謝の気持ちが湧いてきます。学費も日本とは比べ物にならないほど高いですし、生活費も払ってもらいます。もし留学に行こうと考えているならば、親にいつもありがとうって言うてみてください。「海外大学に行った人が偉そうに親に感謝しろって言うてたんだよねー。だからいつもありがとうお母さん、お父さん。」こんな形でいいので言ってみましょう。それが自分は留学に行く資格があるかをチェックする指標になると思います。まずは親に感謝することができるかどうかです。大丈夫、勉強はなんとかなります。

内田

「世界の窓」で言わせてもらったことの繰り返しになりますが、留学は合う子と合わない子がいます。日本で輝ける子もいっぱいいます。海外に行きたくないのに送り込むと痛い思いをして逆に自信を失ったりするので注意が必要です。オーストラリアは本当に自由で、メルボルンでは何を着ても構わないしどんな主義の人でもいさせてくれます。これは世界の窓では言わなかったのですがジェンダーに対しての考え方が日本と比べ物にならないくらいに進んでいます。スカートを履いている男の人は珍しくないですし、みんな性別関係なく仲良くなります。実は森村の同窓会に行った時、会場に綺麗に右半分には女子、左半分には男子が集まっていたのでショックでした。西側で教育を受けると日本がなぜ性差別的だと言われるのかその理由が分かるようになります。オーストラリアでは性別による役割分担は良く思われていないので日本で「女子/男子だからしなきゃいけないこと」に悩まされている方は心地よく感じると思います。外見差別も同様です。オーストラリアに来てから無理に痩せようと思わなくなりました。いろんな体型の人たちがいるので自分は自分でありのままでもいいんだって思えるようになりました。オーストラリアは思想的にも社会のシステムのにも自由です。最後になりましたがやはり海外では強さがなければ生きていけません。多様性は無防備を拒否するからです。私にとって強さは野心から来ています。絶対成功するという意思があるからこそ辛い時に乗り越えなければと思います。日本では主張が激しいと嫌われることもあります。頑固さ、野心、主張の強さ、全部海外で強みになります。辛いことも多いですが私は本当にオーストラリアに来て良かったです。これからもどこまで遠くに行けるか挑戦し続けます。

ご覧いただきありがとうございました。



左：市川 中央：内田 右：メルボルンを訪れてくれた104期林君  
メルボルン中華街にて

